

1-2-15c言語／言葉

「言語」の第3弾は、「記号」です。

「記号」は文章中にいきなり出てくるので、その意味が普通にわかるようになってほしい語です。

②記号

i) 記号＝意味

次のA、B、二つの絵を見てください。

Aは、「プラス」とか「10」に見えますよね。

じゃあ、Bは？

意味がわかりますか。

このように、意味の見出せるものを「記号」と呼びます。

私たちは、さまざまなものに「記号性」を見出します。

たとえば、私たちは、どんな服を着ているかで、その人がどのような人かわかります。

警察官の制服を着ていれば、その人を警察官だと思います。

男性がスーツにネクタイをしていたら、サラリーマンだと思うでしょう。

私たちは、目の前の人の服装や表情にさまざまな意味を見出します。

人の服装や表情もまた記号性を帶びている、といつていいでしょう。

ii) 記号の構造

でも、私たちは、その意味を直接見ているわけではありません。

実際に見ているのは、絵であり、服装であり、表情です。

このように、目や耳でとらえられる、外に表れている／現れている部分を「記号表現」といいます。

言語も記号ですので、音声言語は耳で、文字言語は目で、点字は指でとらえることができます。

それがあるルール、「コード（code）」に基づいて解釈する。

そこに、意味が生まれます。

それを「記号内容」といいます。

記号内容は、記号表現をコードに基づいて解釈したものですので、同じ記号表現でもコードが変われば記号内容は変わります。

先ほどのAを、数学というコードで読めば「プラス」となり、漢字というコードで読めば「10」になるのは、そのせいです。

ここでいう記号表現が分節のところでとりあげた「名前」であり、記号内容が「概念」です。

が、たとえば机が「つくえ」と呼ばれることに必然性はありません。

「プラス」を「+」という形で表す必然性はありません。

この2つの結びつきはきわめて恣意的です。

それをまとめあげるのがコードです。

コードは、ただ個々の記号表現と記号内容を結びつけるルールではなく、そうしたルールの総体、体系的なルールです。

机が「つくえ」と呼ばれ、椅子が「いす」と呼ばれ、壁が「かべ」と呼ばれる、、、そうしたルールの総体こそが日本語という言語を作り上げています。

この世界をどう分節するか、それにどのような名前を付けるか、は恣意的です。

それを取りまとめているコードももちろん恣意的です。

言語は恣意的なものなのです。

ii) 差異化／同一化

その言葉が世界を分節します。

世界に「違い」を生み出します。

言葉は差異です。

それがよくわかるのが、いわゆるブランド。

ロレックスやベンツと聞くと、何か高級な感じがしますよね。

名前が「違い」を生み出しています。

もちろん、それは、ロレックスやベンツがこれまで築き上げてきた品質への信頼というコードに裏打ちされたものです。

が、中古で安く手に入れたものでさえ、高価に思えてしまうのは、名前のもつ魔術だといえるでしょう。

だから、メーカーが新製品にどのような名前を付けるか、は、何をアピールしたいかによって変わります。

新しい名前を付けると、これまでとは違う製品、新しさをアピールできます。

同じ名前を付けると、旧製品と同じ信頼性をアピールできます。

名前を変えれば差異化が働き、逆に名前が同じだと同一化が働きます。

こうしたことは、言葉が差異だからこそ起こるのです。

iii) 言語=差異の体系？

言葉が差異ならば、言語は、差異をまとめたもの、差異の体系です。

しかし、「違い」にばかり注目してしまい、そもそも言語のもっていた、生との深いいかわりを見失っては、言語の本質を見誤ってしまいます。

言葉は、人間が生きるために世界を分節した結果生まれてきます。

言葉には、人間の経験が込められています。

生きた人間の特別な思いが込められています。

それが「違ひ」として表出したものこそ言葉です。

だから、人間の生とのかかわりが薄くなると、言葉は死にます。

3年前の流行語大賞、覚えてますか。

流行語が数年で命を失うのは、それがただの流行にすぎず、人間の生とのかかわりがそれほどないからです。

たしかに、言語は差異の体系であるのかもしれません、その差異が人間の生との深いかかわりのなかで生まれたものであることを決して忘れてはなりません。